

み翼のかげに

詩編一七編

あなたの慈しみの業を現してください。攻め来る者から逃れる道を右の手をもって救われる方。瞳のように私を守り あなたの翼の陰に隠してください。(7、8)

ある人々から不当な攻撃を受けて命を狙われている詩人が、自らの無実を訴えつつ、神の守りを祈り求めている詩です。今日の聖句は、神の守りを豊かな情感をもって描いています。詩人はまず自らを傷つきやすくもかけがえのない存在として瞳にたとえます。瞼や睫毛が瞳を大切に守るように、主が優しく、繊細に自分を包んでくださるようにと願っています。さらに詩人は、母鳥がそのひなを翼の下に入れて外敵から保護するように、神が外敵から自分を保護してくださいとうにと求めます。敵の攻撃がどんなに激しくとも、み翼の下は常に平安が保たれているのです。詩人は神を避け所とし、神のみ守りを堅く信じたのです。主が私たちをも、瞳のように守り、み翼の陰にかくまってくださいとは、何と幸いなことでしょう。主の御手の中にこそ、安らぎを見出そうではありませんか。